３．５歳児事例

濱田　貴宏　　中野　淳子

事例１　「うん？　こう？」　　11月４日（金）

Ａ児　「先生、野球しよう！」
教師　「うん、いいよ」

はじめ、仲間が集まらず、二人ではじめた。教師がホームベースとバッターボックス、一塁ベースを地面に書いた。

Ａ児　「二塁と三塁は？」
教師　「二人しかおらんし、一塁だけでしよう。仲間増えたら二塁もかこう」
Ａ児　「じゃあ、俺ヤンキース！」
教師　「先生は、タイガースね。先生から投げるわ」

教師が投げようとするとＡ児はホームベースの上に立った。

教師　「そこじゃなくて、四角い箱あるやろ、そこの中に立つげんよ」
Ａ児　「ああ、ここか、わかった」

そういって、左バッターボックスに入ったので、教師が駆け寄り、「そうじゃなくてこっち」といいながら右バッターボックスに移動させた。

教師　「いくぞ！」

Ａ児は右手と左手の持ち方が上下反対だったが、はじめはそれもありだと思い３、４球投げた。しかし、どうも振りがぎこちなく、ボールにあたる気配がなかった。

教師　「Ａ児君、右手と左手反対だよ。」（身振り手振りを交えながら伝える）
Ａ児　「うん？　こう？」
教師　「そうそう」

それでも、空振りしたボールを後ろへ拾いに行き、再びバッターボックスで構えると、手は逆になることが何回も続いた。

教師　「じゃあ、こっち（左）のバッターボックスで打ってみるか。足はこうで、体の向きはこんな感じ。で、顔はあっち（ピッチャーの方）に向けて…こんな感じか

な」（手取り足取り、教える）

教師　「一回、振ってみて。（A児、素振りをする）そうそう、いい感じじゃない」

左の方がバットがスムーズに動いているので、そっちで打たせることにした。
とはいえ、なかなかボールにあたらない。

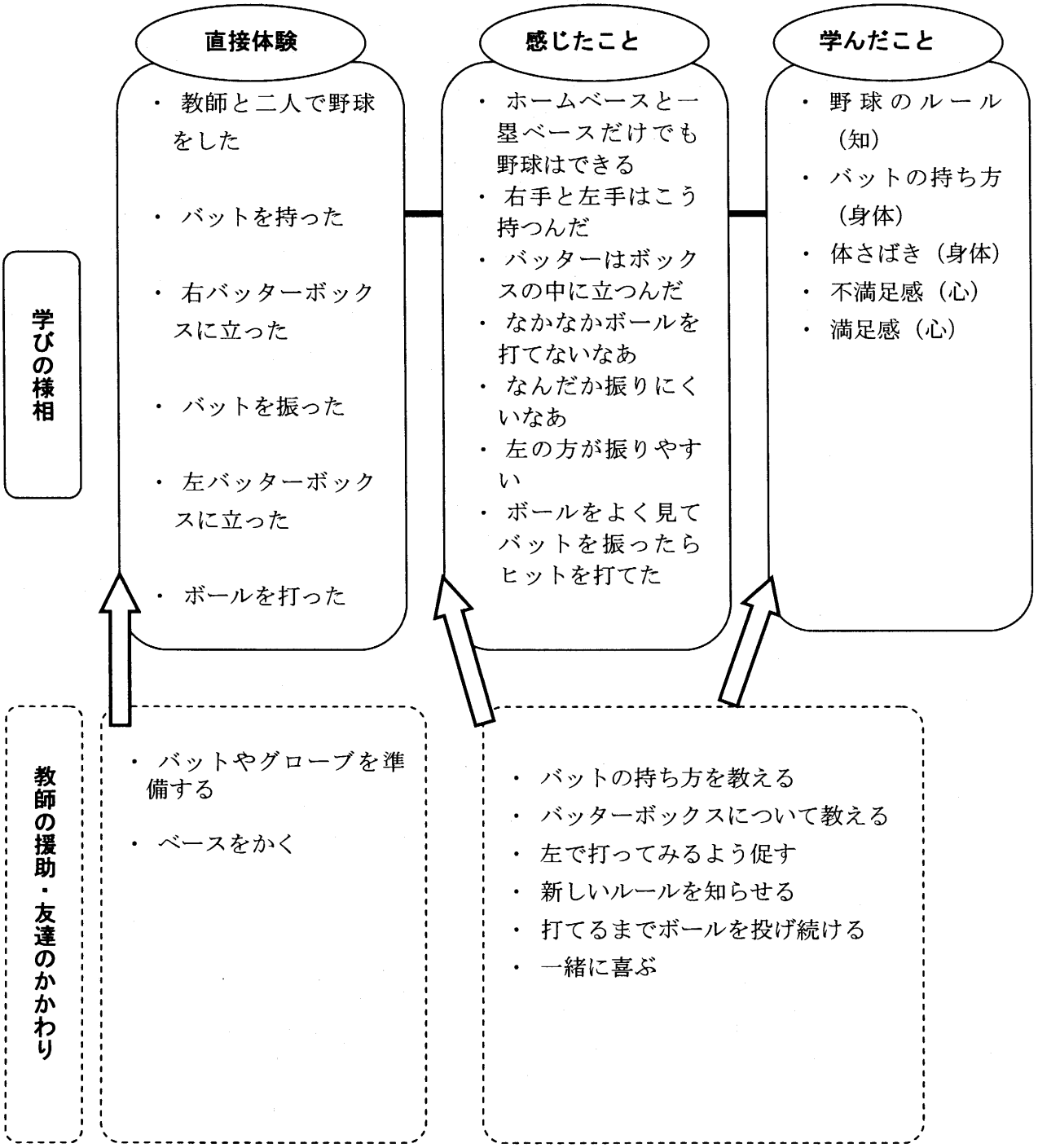
教師　「いいか、ボールをよーく見て打つげんぞ」
A児　「うん」

20回以上空振りした後、ようやくボールがバットにあたり、前に飛んだ。

教師　「おお、いったあ！」
A児　「やったあ！ヒットや！」
教師　「やったなあ。バットに当たったなあ」

ただ、打った後、バッターボックスに立ったままだったので、打ったら一塁ベースに走ること、一塁ベースまでは先生（守備側）と競争なのだということを伝えた。すると、二回目からは一生懸命一塁まで走っていた。
そうこうするうちにB児やC児、D児らが仲間に入り、大勢で盛り上がり始めた。

＜「学び」の様相と教師の援助＞



＜今後に向けて＞

さらに一緒に遊び込み、楽しさを共有するようにする。また、キックベースボールなど他の遊びに広がるような援助も意識していく。

事例２－１　「やってみる」　11月11日（金）

つき組タイムで鉄棒遊びをした翌日、教師は朝の集いで、「今日、先生は遊びの時間に鉄棒じゃんけんをします」と話した。その言葉にのって、Ｓ児、Ｐ児、Ｔ児、Ｏ児、Ｖ児がやってきた。対戦を書けるように、ホワイトボードを持っていった。その日は、「こうもりじゃんけん」「ぶたの丸焼きじゃんけん」をしていた。初めはつき組だけだったが、ほし組Ｑ児、Ｒ児も途中から加わってきた。

翌日も鉄棒遊びは続いた。鉄棒の所へＯ児とＰ児に引っ張られていくと、もうＱ児とＲ児が遊んでいた。Ｑ児とＲ児は腕立て支持の姿勢で足じゃんけんをしていた。

教師　「それおもしろいね。今日は、それでいこうか」

早速、対戦が始まった。Ｏ児が何度も続けて勝った。嬉しそうだが苦しそうな表情になってきた。弱音を吐かずに頑張っているので、教師はさらに自信と腕の力をつけてほしいと考え、新たなルールを付け加えた。

教師　「Ｏ児ちゃん、苦しそうです。でも落ちたら負けだよ。がんばれ」

Ｏ児はそのあとも勝ち続けた。負けたあとも清々しい表情で、ホワイトボードの対戦表を見て、教師に話しかけてきた。

Ｏ児　「もう、８回も勝ったよ」
教師　「Ｏ児ちゃん、さっきすごかったね。よく途中で落ちんかったね。手痛くない？」
Ｏ児　「だいじょうぶやよ」

何回かくり返した。Ｏ児は自分では飛び上がりができないので、自分の番になると鉄棒につかまらせてもらうために「先生、先生」と呼んだ。Ｏ児が「ぶたの丸焼き」や「こうもり」ができるので、教師は飛び上がりもできると考え声をかけた。

教師　「自分でやってみよう。さるの手で、鉄棒を押さえるようにして、せえーの」
「もう１回」

しかし、自分の力だけではできなかった。教師に支えてもらいながら対戦を続けた。
そのうちに対戦表のホワイトボードはいっぱいになった。

Ｑ児　「今度、チームにしよう」
教師　「それ、いいねえ」
Ｐ児　「いいよ。わたし、こっち」

Q児、R児、とP児、O児、U児の２チームに分かれた。教師は対戦表を書くことにした。O児の順番になると予想通り「先生」と呼んだ。仲がよくても自分からはP児に頼めないのがO児である。

教師　「チームで助けてもらって」

その言葉を聞いて、遠慮していたP児もO児の腰を持ち上げた。

教師　「O児ちゃんできたねえ。Pちゃん、力あるね」
P児　「軽かったよ」

O児の順番が回ってくる度にP児が支えた。くり返しているうちに、かたづけの時間になった。P児もO児も嬉しそうにホワイトボードをかたづけた。

事例２－２　「やってみる」　11月13日（月）

３日後、また同じメンバーが鉄棒をしていた。今日はベンチを踏み台にして飛び上がっている。O児は、この前よりも体を支える力がついているように見えた。

教師　「O児ちゃん、こっちで飛び上がってみたら？ なんかできそうに見えるよ」
O児　「やってみる」

O児は素直に横の低い鉄棒に移ってやってみた。予想通りできた。

教師　「すごい。できた、できた、もう１回やって」

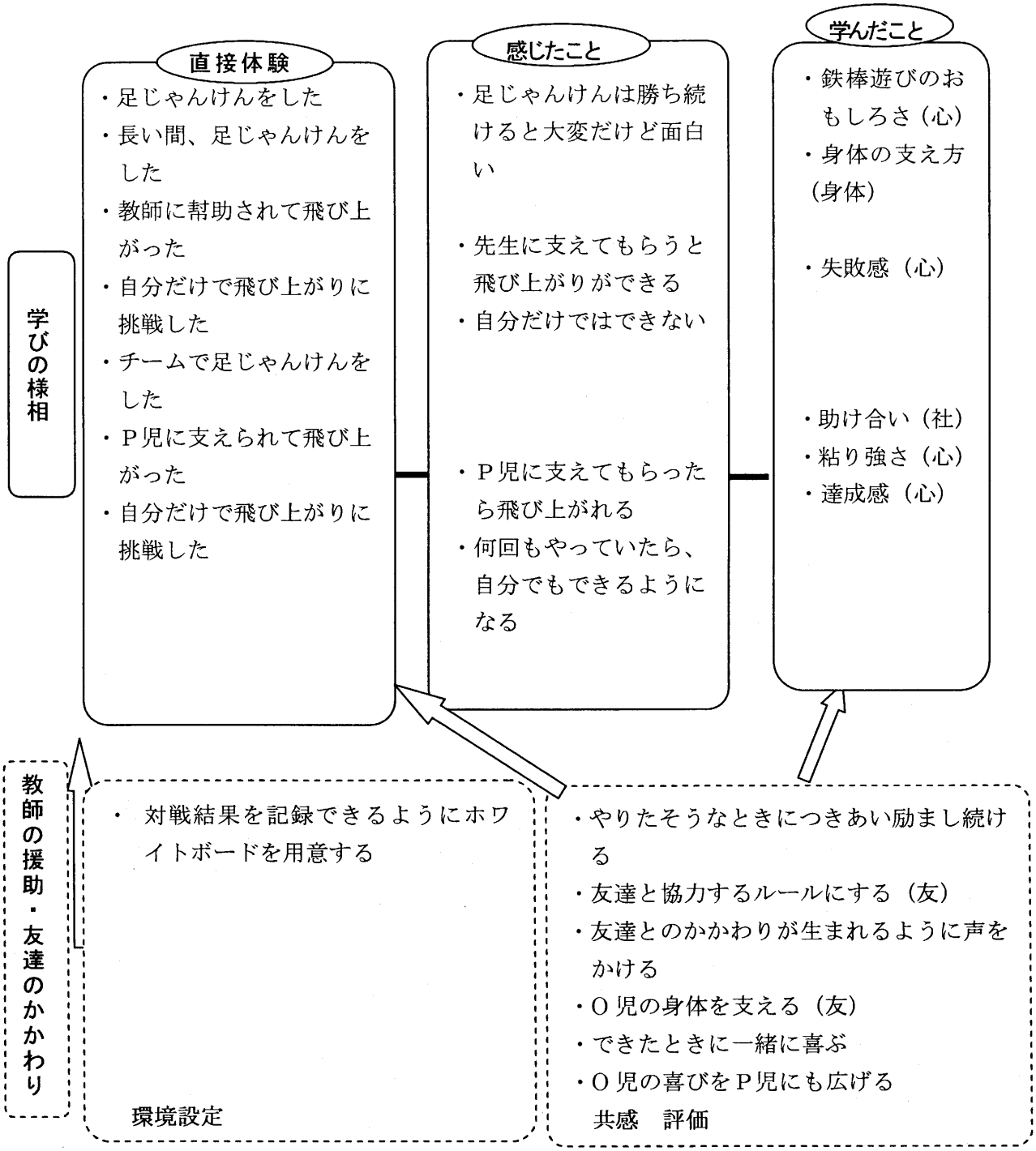
O児は嬉しそうに、もう１回やってみた。

教師　「やったね。もう１回もう１回」

O児はさらに何回も飛び上がりをして見せた。P児がどうしたの？という顔で近寄ってきた。

教師　「O児ちゃん、自分で飛び上がったよ」
P児　「本当だ、前できんかったのに」
教師　「やってればできるようになるんやねえ」
O児　「そうや」
そういってもう一度飛び上がって、P児と足じゃんけんを始めた。

＜「学び」の様相と教師の援助＞



＜今後に向けて＞

・O児はいつも教師や友達の言動をよく見、よく聞いて行動している。しかし考えすぎてみんなの中に入れなくなったり、自分ができるかどうかの見通しを持ちすぎて行動が止まったりしてしまうことがあった。今後も本事例のような経験を通して友達と助け合って、いろいろなことに挑戦できるように見守っていきたい。

事例３－１　「そっちの方が大きいからそっちなら倒せる」　　12月９日（金）

前日に始まったピタゴラスイッチごっこをW児、Ｚ児、Ｔ児、Ｊ児らがつき組の保育室で、楽しんでいた。牛乳パックでつくった滑り台に「あいうえお積み木」を接続させていた。何度も積み木を倒しては並べることを繰り返していた。ようやく積み木が並べられたのでＺ児がスーパーボールを転がした。スーパーボールは、積み木に当たって、積み木が将棋倒しになった。しかし、積み木の間隔が狭くて積み木は止まってしまった。

教師　「止まっちゃったね」
Ｚ児　「狭いんだ」
教師　「なるほど、狭かったんだって、Ｊ児くん」
Ｊ児　「そっか」

そう言って、Ｊ児は並べ直した。Ｊ児が並べたものをＴ児が並べ直している。

教師　「Ｔ児ちゃん何しているの？」
Ｔ児　「だって広いから」
教師　「広いとだめなの？」
Ｔ児　「倒れないの」
教師　「Ｊ児君、広いとだめなんだって」
Ｊ児　「わかった」

そう言いながらＪ児は並べては倒し、並べては倒しの繰り返し。やっと並べて、Ｚ児がボールを転がした。しかし、滑り台と積み木の角度があっていないために、ボールはそれていった。それまでの様子を隣の積み木の上から見ていたＡ児が乗り出してきた。

Ａ児　「もっとこっちの方に向けなきゃだめなんだよ」
教師　「そっか。じゃあ動かないように留めようか」

教師が近くにあったガムテープで牛乳パックと床を固定した。もう一度Ｚ児がボールを上から転がした。しかし、ボールのスピードがなく、積み木は倒れなかった。

教師　「あれ？」
Ａ児　「ガムテープがざらざらしてるからだよ」
教師　「ざらざらしてたらだめなの？」
Ａ児　「ここでボールがちょっと止まるんだよ」
教師　「そうかあ。じゃあ、ガムテープは外そうか」
Ａ児　「ここを切ればいいんだよ。そしたらここでバウンドしてごんごんって積み木に

当たるよ」
教師　「どうする？　Z児くん」
Z児　「切る」

事例３－２　「そっちの方が大きいからそっちなら倒せる」　12月９日（金）

また、Z児がボールを転がした。しかし、積み木のカーブの並べ方が悪かったために止まってしまった。Z児は、並べ方ではなく、ボールの大きさが原因だと思ったらしく、もう一つの大きな赤のスーパーボールをB児から返してもらおうとした。理由がわからないB児は怒り出して、Z児と言い合いになった。

教師　「どうしたの？」
B児　「Z児が勝手にボールを持っていこうとするんだ」
Z児　「だって、B児は使ってない」
W児　「B児くん　使いたいんだったら理由をいって」
J児　「そう。理由を言えばいい」

３人に責められたB児はその場を去ろうとしたので、教師はZ児の気持ちが通じていないと思い、B児をその場に引き留めた。

教師　「B児君、どうしてZ児君がその赤いボールを返してもらおうとしたかわかる？」
B児　「そんなの、わからない」
教師　「Z児君、B児君に伝わっていないみたいだよ。理由をもう１回言ったらどう？」
Z児　「そっちの方が大きいから、そっちなら倒せる」

そう言って牛乳パックの滑り台の方を見た。それを見たB児は初めて状況がつかめたようで、一瞬で表情がかわった。

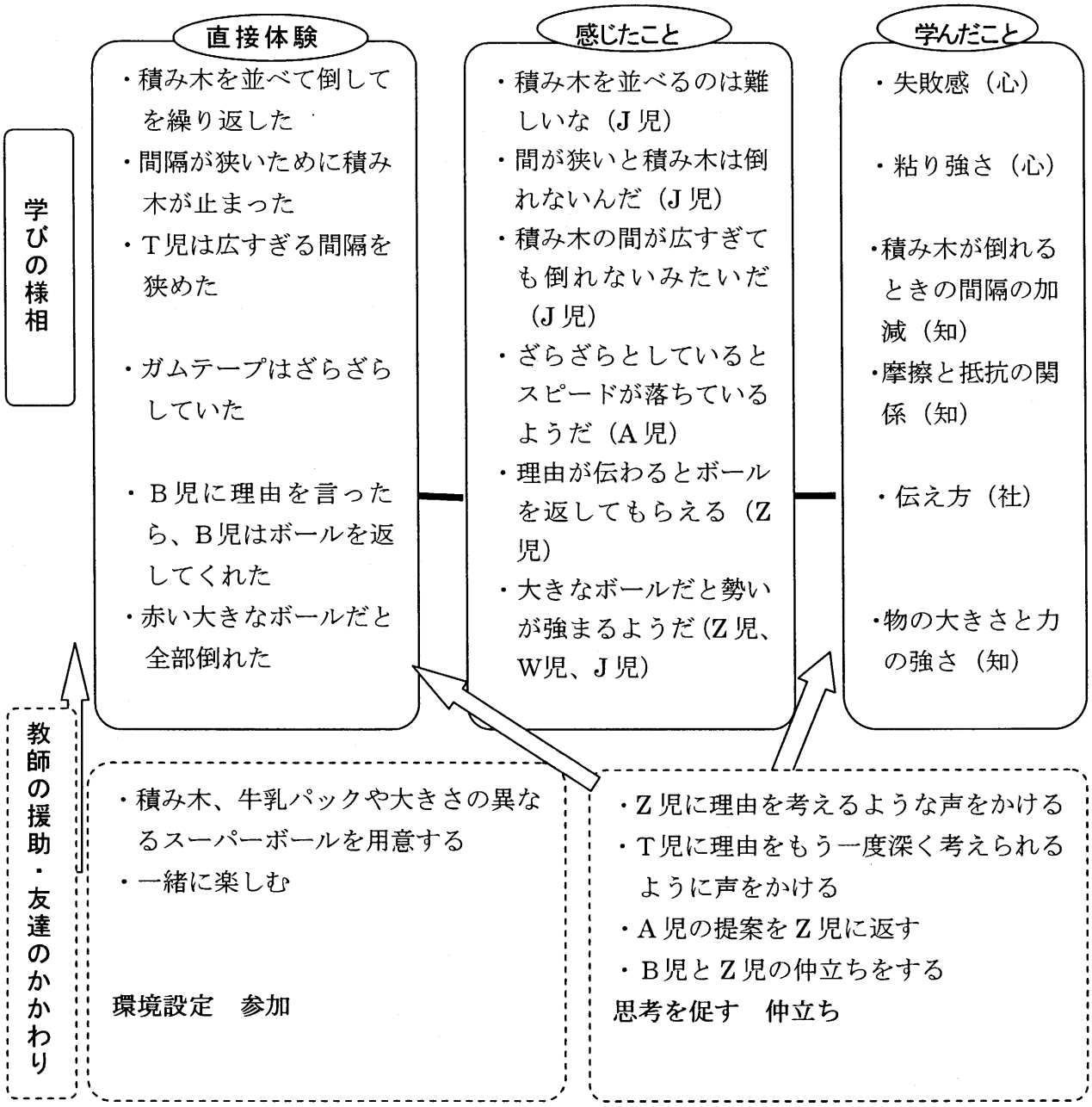
B児　「やってもいい？」

そう言って、赤い大きなスーパーボールを転がした。ボールは勢いよく転がって積み木が最後まで倒れた。Z児、W児、A児、J児、T児、みんなが思わず拍手をした。

Z児　「やっぱり大きい方がいいんだ」

満足をしたB児は赤い大きなスーパーボールを残して、大きな積み木の基地へ戻って行った。ピタゴラスイッチごっこは、C児も加わり、机の下までつなげてかたづけの時間まで続いた。

＜「学び」の様相と教師の援助＞



＜今後に向けて＞

・J児に対して、教師が先回りをしすぎた反省が残る。J児はじっくりと考えるタイプなので、今後はJ児の様子を見守って、援助をしていきたい。

事例４　「ふーん、そうなんだ…」　12月８日（金）

したい遊びの時のことである。教師、Ｅ児、Ｆ児の三人で紙飛行機飛ばしを始めた。Ｅ児は昨日家でつくった紙飛行機を袋いっぱいに持ってきていた。

Ｅ児　「どれにしようかなあ・・」
教師　「どれが一番よく（遠くに）飛ぶの？」
Ｅ児　「…わかんない。まだ試してないから…これ大きいから飛びそうだな…」
取り出したのは、全長30㎝ぐらいの一番大きなものだった。

教師　「ようし、いくぞー、せーの」

三人一緒に飛ばすと、一回目は教師の飛行機が一番飛んだ。

教師　「いえーい、やったー」
Ｆ児　「Ｆ児の、二番！」（Ｆ児のは、教師が貸してあげた飛行機）

他の飛行機に取り替えたりしながら何度か繰り返したが、やはり教師の飛行機が一番よく飛んだ。

Ｅ児　「どうして先生の飛行機はこんなに小さいのによく飛ぶんだろう…」

Ｅ児は教師に聞こえるくらいの声の大きさでぶつぶついいながら、飛行機を飛ばし続けている。

教師　「これ（教師のつくった飛行機）、あげよっか？」
Ｅ児　「うん！」

Ｅ児は教師からもらった飛行機を手に何度も飛ばし始めた。しかし、なかなか教師が飛ばしていたように遠くに飛ばない。

Ｅ児　「…先生みたいにうまく飛ばないんだけど…」
教師　「この辺をこう持って、すっと飛ばすんだよ」

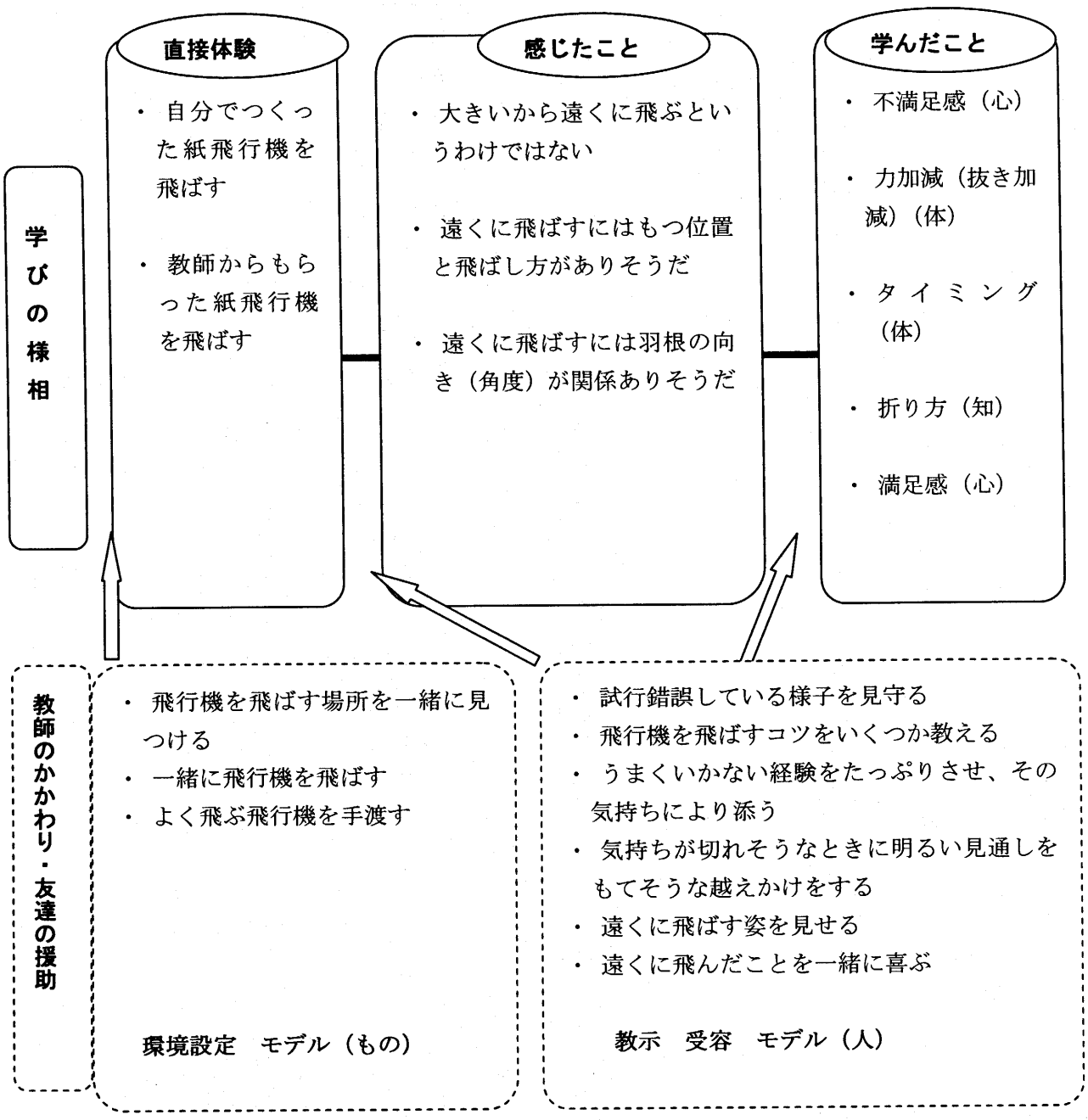
教師はＥ児の前でお手本の飛ばし方を見せた。それを見てＥ児はまた飛ばし始めた。今度は何回かうまくいった。しかし、本人はまだ納得できないようだった。

Ｅ児　「まだうまく飛ばないんだけど…」
教師　「そうか…どれどれ…はーん、飛ばすときに飛行機の羽根をこんなふうに角度をつけてから飛ばすと…（実際に飛ばしてみる）ほーら、よく飛ぶでしょ！」

E児　「ふーん、そうなんだ…やってみよう…」

実際に羽根に角度をつけて飛ばし始めるとよく飛ぶ確率がうんとあがり、E児の顔がにこにこになった。そして、何度も何度もかたづけの時間まで確かめるように飛ばし続けていた。

＜「学び」の様相と教師の援助＞



＜今後に向けて＞

自分のつくったものと教師のつくったものを視覚や触覚を使って比較させることで更なる学び（よく飛ぶための秘密）に迫ることができると思われるので、そこを援助していきたい。

事例５　「いちばん下しっかりさせとったらだいじょうぶや」　12月15日（月）

M教師とA児、G児ら数名の幼児がプレイルームで積み木を使って遊び始めた。積み木は前週のクリスマスの集いで養護学校からプレゼントされたもので、使うのは初めてである。積み上げてみたり、家を作ろうとしてみたり、それぞれ遊びを模索している。教師はドミノに挑戦していたA児を手伝っていたが、なかなかうまくいかない。そこへH教師がやってきた。

H教師　「おおーっ、おもしろそうやな。天井まで届く位の高いやつ作ってくれ」

その言葉につられて、幼児たちは積み木を積み始めた。A児はそれでもドミノに挑戦していたが、

A児　「(この積み木は）軽すぎてだめや」

と言って積み木を積み上げ始めた。

M教師　「さあ、だれがいちばん高く積めるかな？」

そこへH児がやってきた。

H児　「なにしとるが？」
A児　「積み木積んどる」
M教師　「どれだけ高く積めるかの競争」
H児　「はーん。おれもやる」

積み上げ始めたが、十数個（高さ15～20cmぐらい）積んだところで崩れてしまった。次も同じ位のところで崩れた。A児、G児も似たり寄ったりである。

H児　「あーっ、むずかしい！」
M教師　「難しいねえ…。ねえ、チーム対抗戦にしない？ 二人で力を合わせたら高くなるかも」
H児　「じゃあおれとA児がチームで、先生とG児ちゃんがチームね。高い方が勝ちで、倒れたらそのとき残ってた方が勝ちね。ちょっとでも残ってたら勝ちね」
A児・G児　「いいよ」
M教師　「いくよ、よーい、どん！」

最初はどちらも20段の少し手前で崩れてしまっていたため20段（高さ30cmぐらい）が目標だったが、G児が20段を越すようになった。

H児　「なんでG児ちゃん、あんだけ積めるんやろう…？」
A児　「先生と一緒にやっとるからやろ」

M教師　「実は先生、あんまり手出してないんだけど。G児ちゃん、どうして？」
G児　「…（無言）」

A児・H児はG児の積み木を凝視していた。そのとき、G児の積み木が揺れ始めた。崩れるかと思ったが、G児はうまく手で押さえている。

H児　「G児ちゃん、すっげー！」
M教師　「ねえ～。何個積めたかな？」
G児　「せんせい数えて」
M教師　「いくよ。1、2、3……27！ すごーい！ G児ちゃん、27個（高さ40㎝ぐらい）積んだよ」
G児　「やったーっ！ H先生に言ってくる」

と、G児がその場を離れた。その間H児・A児は丁寧に1つずつ積んでいた。

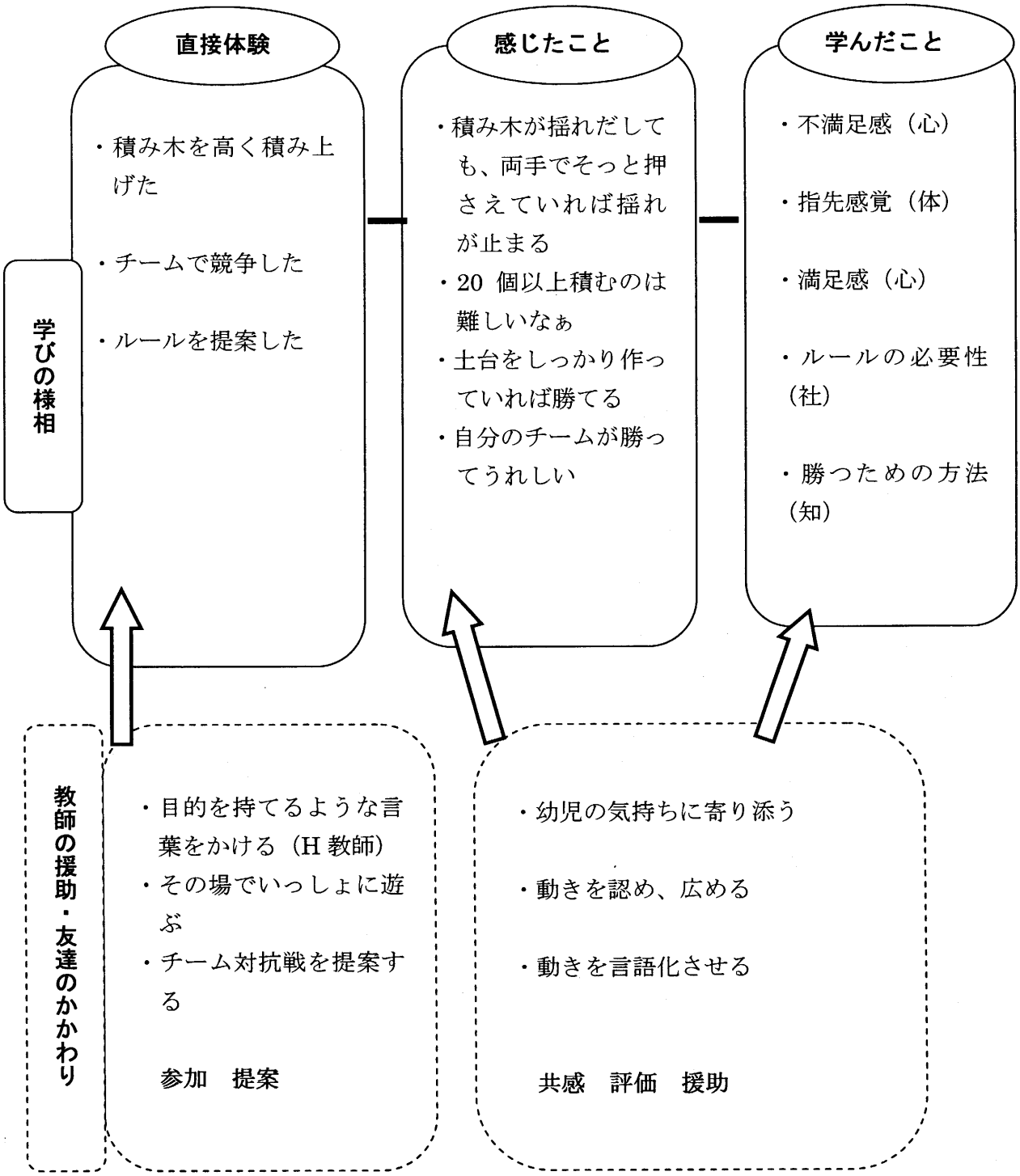
A児　「もっと高く積んでやる」

G児が嬉しそうに走って戻ってきて、再び積み始めた。ところが次の一段を積むやいなや、それまで積んだすべての積み木が崩れてしまった。

G児・皆　「あっ…」
M教師　「残念だったねぇ」
H児　「おれらの勝ちや！だってG児ちゃんの全部倒れたもん。おれらのが残ったからおれらの勝ちや」
M教師　「そういえば、ちょっとでも残った方が勝ちなんだっけ」
H児　「そうや。全部倒れたらだめ。おれらのは倒れても下のほうが残っとったからだいじょうぶやったもんな」
A児　「うん」
H児　「よし、（この次も）いちばん下しっかりさせとったらだいじょうぶや」
M教師　「わぁ～、いろんな作戦があるんだね」

この後も競争は二回、三回と続き、慎重に土台をつくるH児の姿がみられた。

＜「学び」の様相と教師の援助＞



＜今後に向けて＞

自分たちでルールを考えたり工夫したりして遊びを楽しめるよう支えていきたい。

事例６　「Ｊちゃん、これにクルミを転がすの」　12月21日（水）

12月初旬から始まったピタゴラスイッチごっこは断続的に続いていた。今日はＪ児、Ｋ児、Ｉ児の３人で組み立てている。最初にＪ児と教師でＮＨＫ教育ＴＶ「ぴたごらすいっち」のビデオを視聴した。そのあと、Ｊ児はトイレットペーパーの芯を要求した。Ｉ児は牛乳パックで仕掛けをつくろうとしている。Ｊ児は黙々とはさみで芯を切った。切り終わったのを見計らって、教師はＪ児に声をかけた。

教師　「Ｊ児君、何つくっているのかな」
Ｊ児　「これがこうなってこうなって・・・」

教師に身振り手振りで自分のつくろうとしているもののイメージを話す。ところがそこへＨ児、Ｓ児、Ｅ児らがやってきてあやとりの話をし始めた。その勢いに押されて、Ｊ児は困った表情になった。Ｋ児がＪ児に他の仕掛けをつくろうと誘いをかけた。しかし、Ｊ児はその誘いを断り、ずっと芯を持ったまま険しい表情になった。牛乳パックと格闘していたＩ児が急に大きな声で教師に話しかけた。

Ｉ児　「わあかった。Ｎ先生、ここ固いから切って」

Ｊ児は、遠慮なく自分の思いを伝えて教師に援助をしてもらうＩ児の姿をじっと見ていた。Ｊ児は意を決して立ち上がり、教師のもとにトイレットペーパーの芯をもってきた。

Ｊ児　「ぼく、これにクルミを転がすの」
教師　「できたんだあ。どういう風にするの」

Ｊ児は４本の芯を持って説明しようとするが、うまくいかない。

教師　「先生も持ってあげようか」
Ｊ児　「うん」

そういって、教師はＪ児の持っていた芯を２つ持った。その間もＪ児は３つ目４つ目の芯の向きを右に左に試行錯誤をしながら芯を並べた。

Ｊ児　「こういって、こういって、こういってここから出る」
教師　「なるほどお　おもしろいね」
Ｊ児　「クルミもってくる」

Ｊ児がクルミをもってきて上から転がしたが、固定されていないので、芯の角度が変わってしまい、クルミが横から落ちた。

教師　「あれえ？」
Ｊ児　「あれえ？・・・（しばらく考えて）もう１回」

Ｊ児は芯の角度を変えて、再挑戦した。しかし、今度は芯と芯の感覚が狭くてひっかかった。

教師　「ありゃ？」
Ｊ児　「・・・・」

Ｊ児は黙って、芯の間隔を広げた。もう一度クルミを転がして、やっと成功した。

Ｊ児　「やったあ」
教師　「やったね」

Ｊ児は教師と目を合わせてよかったという表情になった。Ｊ児は嬉しそうに立ち上がり、ピタゴラスイッチのスタート地点に向かった。そこではＩ児が牛乳パックの仕掛けをずっと試していた。

教師　「Ｉ児くん、Ｊ児くんが面白いの考えたよ」
Ｉ児　「どんなの？」
Ｊ児　「ここからこうなってこうやって、こうやって、ここから落ちる」

Ｊ児がＩ児に指で説明した。

Ｉ児　「おれが持つ」

そう言ってＩ児は教師と一緒に芯を持って、Ｊ児が転がした。しかし、トイレットペーパーと牛乳パックの連結部分がずれていたのでクルミは床に落ちてしまった。Ｊ児はもう一度クルミを拾ってやってみようとするが、Ｉ児が仕掛けを直し始めたので、しばらく待っていた。Ｉ児が仕掛けを直して声をかけた。

Ｉ児　「いいよー」

Ｊ児は嬉しそうに、クルミを転がした。Ｊ児の仕掛けはうまく転がったが、途中と最後のところで、引っかかり、Ｉ児が手でクルミを進めた。それでも最後まで行くと、Ｊ児は「やったあ」と嬉しそうな表情になった。そのあとも何回か繰り返しているうちにかたづけの時間になった。

教師　「Ｊ児くん、もっとしたいけどかたづける？」
Ｊ児　「うん、でも来年もする。これかたづけないで」
教師　「わかった　このままにしておこうね」
Ｊ児　「うん」

＜「学び」の様相と教師の援助＞

学びの様相

直接体験

- トイレットペーパーの芯を切った
- I児が話の最中に割り込んで自分のしてほしいことを伝えているのを見た
- 自分のしたいことを教師に伝えた
- クルミを転がしたがうまくいかなかった
- 最後までクルミが転がった
- I児のつくった仕掛けも合わせて最後まで転がった

感じたこと

- 先生に言いたいことがあるときには、友達に遠慮せずに言ってもってもいいのかもしれない
- 樋の向きを変えるとクルミがうまく転がる
- 樋と樋の間が狭いとクルミは転がらない
- 友達の考えたいろいろな仕掛けの中を転がると面白い

学んだこと

- 伝え方（社）
- 失敗感〈心〉
- 粘り強さ（心）
- 樋と樋の角度と間隔（知）
- 協力（社）

教師の援助・友達のかかわり

- 積み木、牛乳パック、トイレットペーパーの芯、サランラップの芯を用意する
- 前につくったピタゴラスイッチごっこを保育室に残しておく
- 一緒にビデオを視聴する
- 一緒に楽しむ

環境設定　参加

- 自分の言いたいことを先生に言う（I児）
- J児の説明を聞いて考えを認める
- 失敗したときに一緒に不思議がる
- I児にJ児のアイディアを紹介する
- 一緒に挑戦し続ける

モデル　共感　仲立ち

＜今後に向けて＞

- J児は、イメージはあるが、どう表していったらいいのか躊躇しているときがあるので、J児の考えをよく聞いてイメージを実現できるように援助していきたい。
- J児が自分のイメージを持って動き始めているときには、そのイメージに友達を巻き込んだり、そのイメージを自分から広げていけるように援助していきたい

事例７　「全員ごうかーく！」　　１月12日（木）

Ｉ児　「よーし、みんな集まれー」

この日もＩ児に誘われ一緒にプレイルームでコマを回していたところ、Ｊ児、Ｋ児、Ｌ児も加わり、楽しんだり挑戦したりしていた。その時、Ｉ児の声かけでみんなＩ児の側に集まった。

Ｌ児　「なんや、Ｉ児君」
Ｉ児　「今からほし組に修行に行くぞ！ そしてみんなパワーアップして、もっとうまくなるんだ！」
Ｊ児　「何するの？」
Ｉ児　「そこで、いっぱい回す練習するんや」
Ｊ児　「わかった！」

少し回せるようになってきたＪ児は元気に返事をした。Ｌ児とＫ児もコマに紐を巻きながら納得したような様子だった。

Ｉ児　「ようし、行くぞー！」

Ｉ児は先頭に立ってほし組に向かっていく。その後ろを三人と教師が小走りについていった。

Ｉ児　「じゃあ、５回まわせたら合格ってことね。いくぞ！」
Ｊ児　「ちょっとまって、まだいいのに紐まいてない…」
Ｉ児　「わかった、できたか…。ようし、じゃあいくぞ！ いっせーのーでー!!」

みんないっせいに回した。Ｉ児はすばやくみんなの回したコマを見渡した。

Ｌ児　「よーしっ！」（勢いよく回っている）
Ｉ児　「えーっと、俺と先生とＬ児のはいい。Ｊ児とＫ児のはだめ」

Ｊ児とＫ児はすばやくコマを拾ってもう紐を巻き始めている。Ｋ児は「うまくできるのになあ」とぶつぶついいながら紐を巻いている。
準備がそろい、２回目が始まった。

Ｋ児　「回った！ 回ったよ！」
Ｊ児　「俺のもや！ よーし！」
教師　「おー！」（拍手）

二人ともにっこり笑顔で回っているコマを見ている。J児のコマはうら返しで回っていたが、目を見開いて喜んでいる。

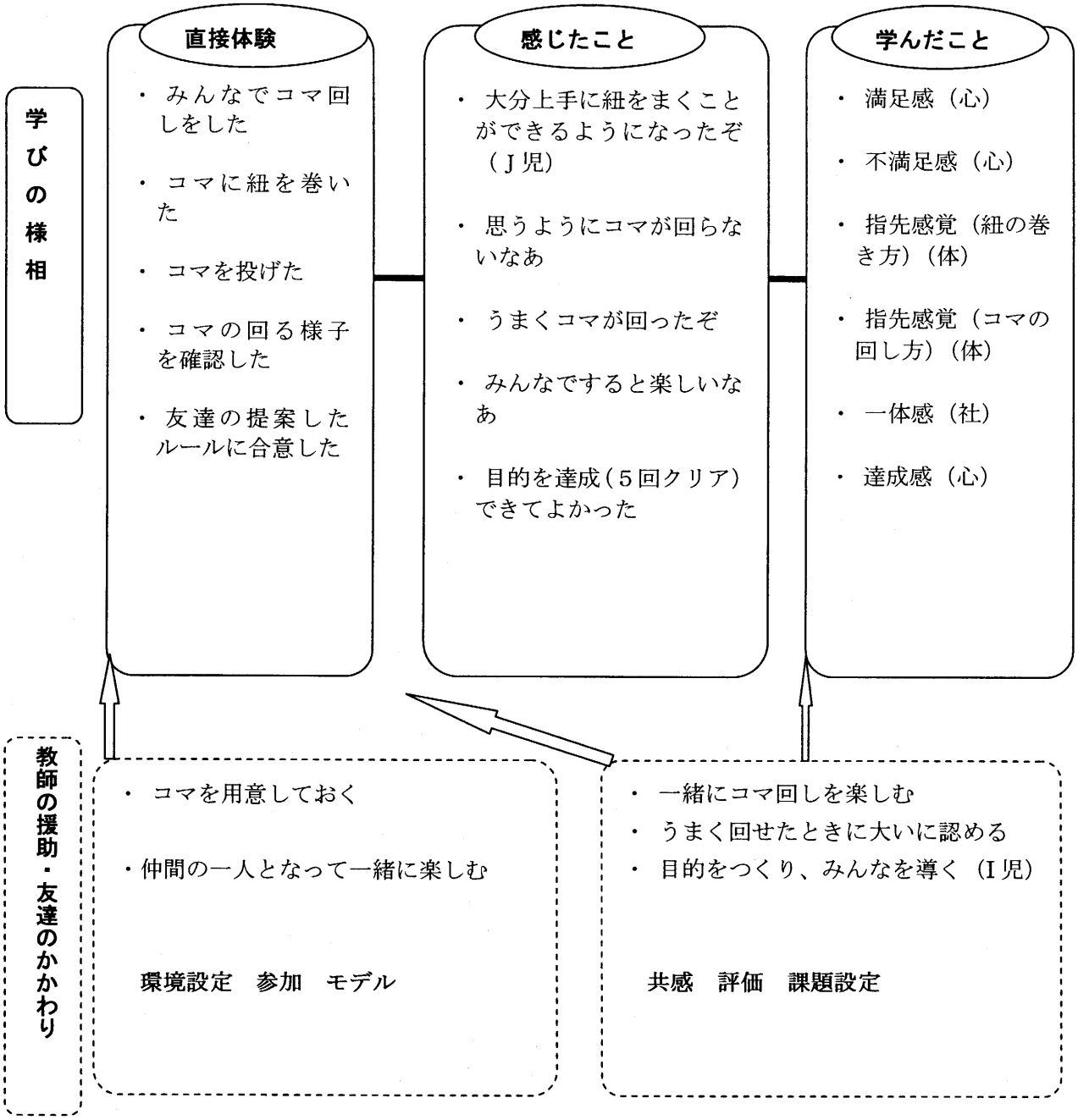
I児　「あっ、俺だめやった…。先生とL児のはオッケー。…K児のはどこいった？」
K児　「あそこ（もう止まりそうになっていた)。でも、僕の、回ったよ！」
I児　「本当にか？」
教師　「うん、回っとったよ」
I児　「わかった。J児は？」
J児　「俺のだめー」
I児　「じゃあ、えーっと、先生とL児が3回、俺が2回、K児も2回で、J児が1回ってことね。よしっ次！」

I児の先導で修行がどんどん進んだ。それぞれ何回も失敗しながら挑戦し続け、全員が5回クリアすることができた。

I児　「やったー！ 全員ごうかーく！」
皆　「いえーい！」「やったー！」

そして再びプレイルームに戻ってみんなでコマ回しバトルが始まった。

＜「学び」の様相と教師の援助＞



＜今後に向けて＞

・コマ回しは一人でもできる遊びだが、そこにいろいろな友達を巻き込みながら「みんなと一緒」という要素を加えて、比べたり競ったり認め合ったりしながら、より楽しくコマ回しを体験できるように環境を整える。

事例８－１　「いつもＹ児にだけ、だめだめっていう」　　２月14日（火）

つき組保育室の隅の方にＹ児とＸ児がふくれっ面で床に座っていた。その横にはＲ児が困った顔で座っていた。Ｙ児とＸ児はよくトラブルがあり、今日も何かあったようなので、教師は話を聞くことにした。

Ｙ児　「どこについて行ったっていいでしょ」
Ｘ児　「だって、Ｙ児ちゃん走って行ったもん。Ｙ児ちゃんがいけないんだよ」
Ｙ児　「走ったっていいんだよ。そんなこといちいち言うのがおかしいよ」

しばらく、教師は話を聞いたが、Ｘ児とＹ児は感情的に相手を責めるばかりなのでＲ児も含めた３人に事情を聞くことにした。

教師　「どうしたのか先生にも教えて」
Ｒ児　「さっき、跳び箱跳んでたんだけど、私の後ろにＹ児ちゃんとＸ児ちゃんが着いてけんかになったの」
Ｙ児　「だって私が先に着いたのに、Ｘ児ちゃんがだめっていうの」
Ｘ児　「だって走って行ったでしょ」
Ｙ児　「走って行ってもいいでしょ」

また、さっきの繰り返しになる。教師は紙を出して、その場の絵をかくように提案した。Ｒ児は紙に絵を描きながら説明した。二人も参加しながら教師に説明した。

教師　「なるほど。Ｙ児ちゃんが早く着いたのに、Ｘ児ちゃんが、走って着くのはだめだって言ったんだ。それでけんかになったのね」
Ｙ児　「そう。私が先に着いたの」
Ｘ児　「だってえ・・・・」
教師　「ということは、今日はどっちがＲ児ちゃんの後ろになるのかな？　Ｘ児ちゃん」
Ｘ児　「Ｙ児ちゃん・・・」
教師　「そうみたいだね」

それでもＹ児とＸ児は何か言いたそうな表情だった。それを察してかＲ児が立ち上がった。

Ｒ児　「けんかばっかりしてるとＸ児ちゃんもバチ当たるよ。Ｙ児ちゃんにさっき当たったでしょ」

そう言い残してＲ児はその場から離れた。

事例８－２　「いつもＹ児にだけ、だめだめっていう」　　２月14日（火）

Ｘ児とＹ児はそのままふくれっ面になった。

教師　「二人ともまだ言いたいことあるんじゃないの？」
Ｘ児　「そう。年中さんのときから」
Ｙ児　「Ｘ児ちゃんはいつもＹ児にだけ、だめだめっていうの」
Ｘ児　「だって、Ｙ児ちゃん、横入りするんだもん」
Ｙ児　「それに、Ｘ児ちゃん、他の子が真似してもいいって言うのに、Ｙ児が真似するとだめって言う」
Ｘ児　「だって、真似してほしくないときだって真似するし、何にも言わないで勝手に真似するもん」
Ｙ児　「真似してほしくないってわからなかったもん」
Ｘ児　「いつも言っているよ」
Ｙ児　「そんなのわかんない」
Ｘ児　「Ｘ児が言っても、Ｙ児ちゃん、違う違うって言って、Ｘ児いうこと聞かない」

二人の押し問答はずっと続きそうだった。Ｙ児には相手の思いを受け止めてられるようになってほしいと教師は考えていたので、ここで確認をした。

教師　「Ｙ児ちゃんはすぐに違う違うって言っちゃうの？」
Ｘ児　「そうだよ」
Ｙ児　「違うもん」

いつの間にかＯ児が側にいたのでＯ児に意見を求めた。

教師　「Ｏ児ちゃん、どう？」
Ｏ児　「Ｏ児ちゃんが言ったときにも、Ｙ児ちゃん、違うって言ってたよ。お友達の話を聞けばいいんだよ」

今度はＹ児がしゅんとした表情になった。Ｘ児は自分とＯ児が同じ気持ちだったのですっきりとした表情になった。しかし、Ｘ児は、過去にＹ児を仲間外れにしようとしたこともあったので、Ｘ児の気持ちを確認することにした。

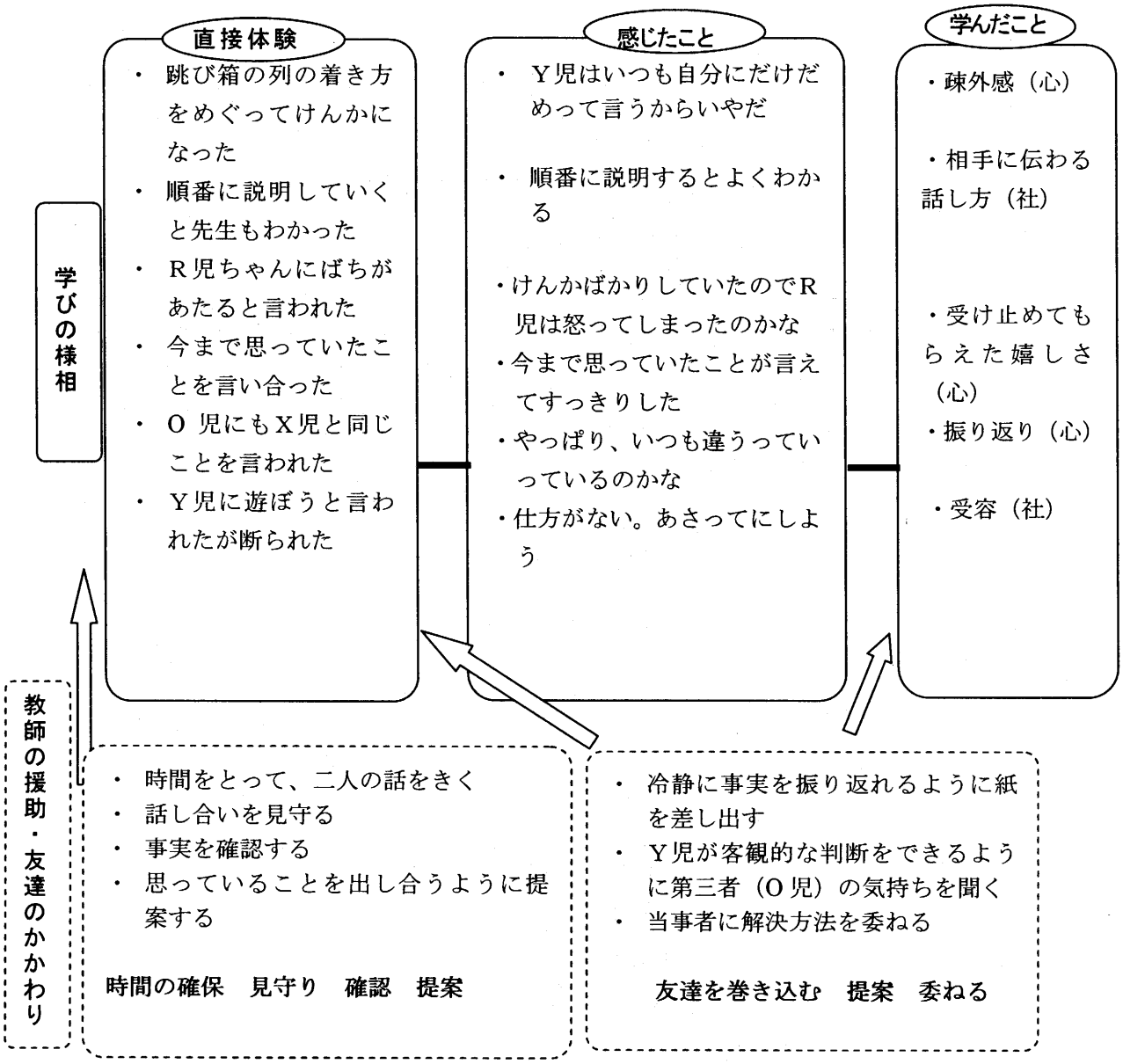
教師　「Ｘ児ちゃんは、Ｙ児ちゃんがお話を聞いてくれれば、いいの？」
Ｘ児　「そうだよ」

しばらく沈黙が続いた。Ｙ児は黙って気持ちの整理をしているようだった。Ｘ児も年中組のときから抱いていた不満を出すことができてすっきりしたようだった。そこで、教師は、二人の気持ちを切り替えるために声をかけた。

教師　「Ｙ児ちゃん、Ｘ児ちゃん、牛乳の時間になったけど、どうする？　まだお話する？」
Ｘ児　「もういいよ」
Ｙ児　「私ももういい。Ｘ児ちゃん明日遊ぼうね」
Ｘ児　「うん、でも一人で遊ぶかもしれない」
Ｙ児　「なんで」
Ｘ児　「だって、ずっと一人で遊んでなかったもん。Ｘ児、つくりたい物があるの」
Ｙ児　「わかった。じゃあ、あさって」
Ｘ児　「いいよ」

二人はそれぞれに牛乳タイムの輪の中に入っていった。

＜「学び」の様相と教師の援助＞



＜今後に向けて＞

・Y児は自分の思いを出しながら仲良く遊んだ経験が少ないので、教師も一緒に遊んで見守っていきたい。また、どうしたら一緒に仲良く遊べるかがわからなくて困っているときには、「友達の様子をよく見てから入る」「手伝いをしながら入る」など具体的な方法を知らせていきたい。

・X児は理由づけはしているが、自分の都合のいいように理由をつけることがあるので、矛盾に気づかせ、公平に判断ができるように援助したい

・R児はけんか自体をだめだと思っていることがあるので、そうではないことを伝えていきたい。

事例９　「こっちこっち、パス！」　２月15日（水）

Ｈ児　「先生、外で遊んでもいい？」
教師　「雨降ってない？」
Ｈ児　「大丈夫！ サッカーするし。先生も一緒にしよう！」
教師　「わかったよ」

Ｈ児は、Ｍ児、Ｎ児、Ｏ児らと一緒にはだしで園庭に飛び出していった。教師も外に出たところ、Ｄ児、Ｉ児、Ｐ児も一緒について来て、サッカーをすることになった。

Ｈ児　「はじめにチームに分かれよう」
Ｎ児　「じゃんけんね」
みんな　「じゃんけんぽん！」（１回目でグーがＩ児、Ｐ児、Ｈ児、教師、チョキがＮ児、Ｍ児、Ｏ児、Ｄ児になった）
教師　「お～、一発で決まったねえ～」
Ｉ児　「よし、じゃあ、これで決まりね」

チームに分かれて相談が始まった。

Ｈ児　「キーパー誰する？」
Ｐ児　「俺するわ」
Ｉ児　「俺シュートするひと」
Ｈ児　「俺ドリブル！」
教師　「先生、どこでもいいわ」
Ｈ児　「じゃあ、パスする人ね」
教師　「わかった。Ｉ児君、パスいくぞ！」
Ｉ児　「オッケー！」
教師　「よーし、いっちょいこうぜ！」
Ｈ児ら　「おー！！」

向こうのチームも相談が終わったようで、いよいよ試合が始まった。

Ｈ児　「先生、あっちあっち！」（ドリブルしながら声と指で指示を出す）
教師　「わかった！ Ｈ児！ パス、パス！」

Ｈ児のパスを受けた教師はＩ児の位置を見た。

教師　「Ｉ児ー！ もっとゴールの近く、もっともっと！」
Ｉ児　「おーい、こっちこっち！ 俺にパス！」

Ｉ児にパスするとうまく受け取ってシュート、１点をゲットした。

Ｉ児　「いえーい、１点ねー」
Ｈ児　「よっしゃあー」
教師　「やったね！」

Ｉ児はチームのみんなにパチンパチンとハイタッチして回り、喜んだ。

Ｎ児　「くっそ～、よし、いくぞ！、Ｍ児！」

再び真ん中からのキックで試合が始まった。

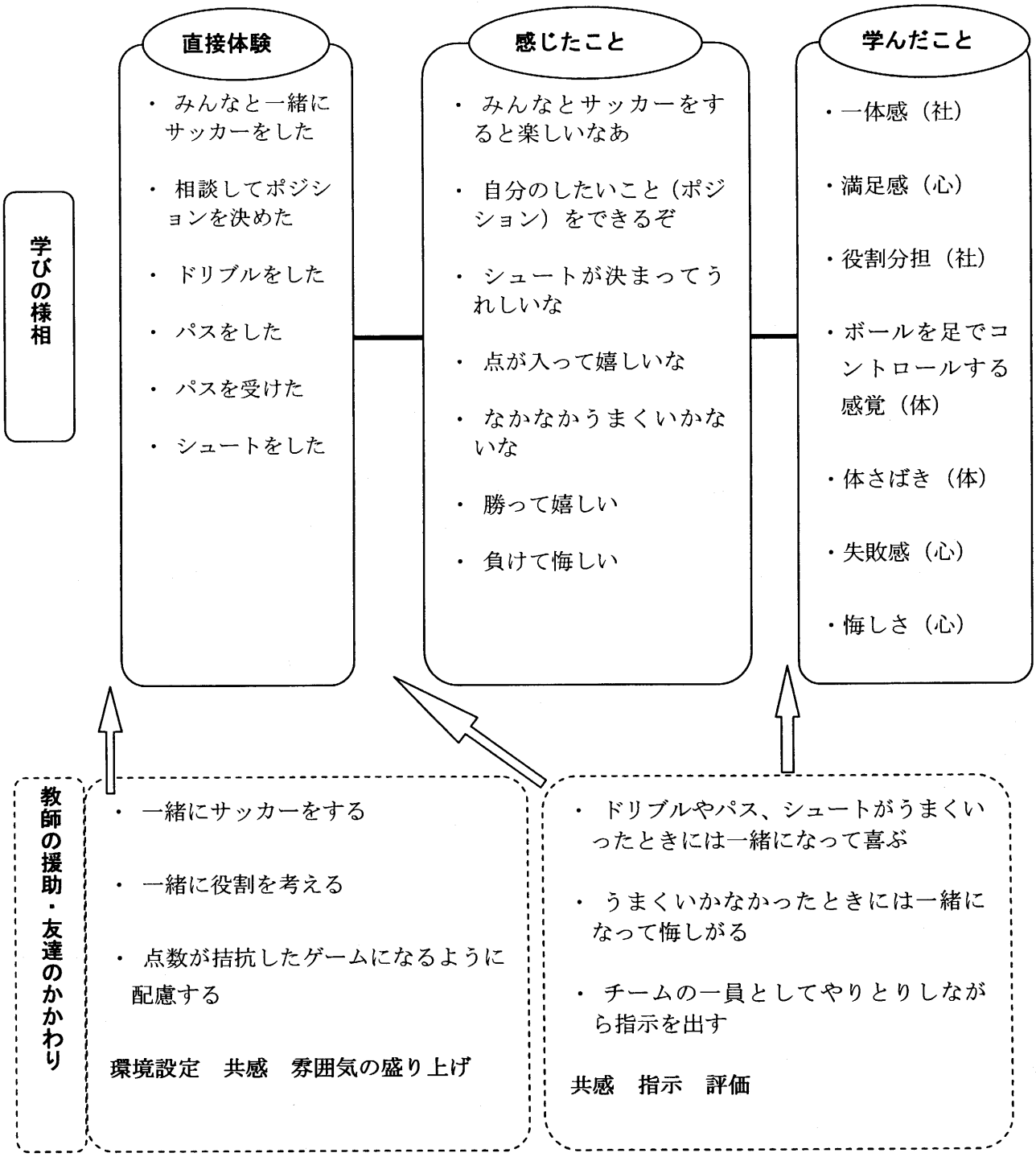
Ｎ児　「Ｍ児、もっとゴールの近くに行け～」（いつもはスローなＭ児も必死に走っている）
Ｄ児　「こっちこっち！ パス！」
Ｎ児　「Ｄ児ももっとゴールの近くまでいけ！」
Ｄ児　「わかった！」（真剣な顔でゴールに向かう）
教師　「Ｈ児。行け、行け！ ボール取りに行け！」

Ｈ児がＮ児に詰め寄るが、Ｎ児はいちはやくシュートを打った。しかし、ボールはゴールを逸れた。そのボールをＭ児が必死に追いかけた。Ｄ児も追いかける。Ｉ児は敵のゴール近くでずっとこっちの方を見ていた。
その後もかたづけの時間になるまでめいっぱいサッカーを楽しんだ。

Ｈ児　「明日も晴れたらまたしようね！」
教師　「オッケー！」

この日は16対14でＨ児のチームが勝った。

＜「学び」の様相と教師の援助＞



＜今後に向けて＞

いろいろな友達と遊んでいる姿を捉え、仲間になって一緒に遊ぶ中で盛り上げ、みんなで楽しさを感じられるようにしていく。

事例10－1　「じゃあいいよ。セーフにしよう」　　2月17日（金）

3学期になって毎日のように、つき組保育室で柔らかいボールを使ってのドッジボールが行われていた。メンバーは日替わりだがW児が中心になって毎日盛り上がっている。今日は、男子と女子に分かれてドッジボールを楽しんでいる。メンバーはW児、C児、Z児、J児、M児、Y児、V児、X児、U児、教師である。

W児とY児がライン上でボールの取り合いになった。二人は譲らない。

W児　「男のボールだよ」
Y児　「違う。こっちに転がってきてたの」

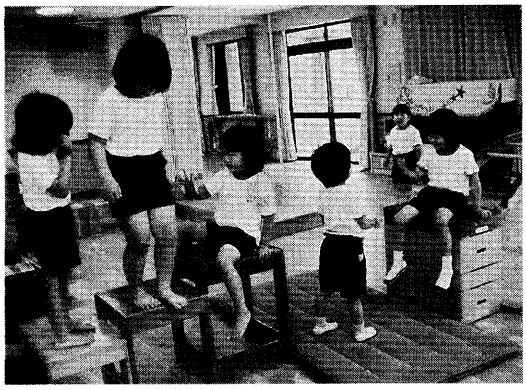
教師が割って入ろうとしたときに、二人の様子を見ていたZ児が走ってきた。

Z児　「こっち（Y児）のボールだよ」
W児　「えっ？ 僕の方だったよ」
Y児　「違う女の方」
Z児　「ボールは、こっちから転がって、ここにあった。だから、女のボール」

Z児は床を指さしながら、説明した。そして、ボールをW児の手からとって、Y児に手渡した。W児は、泣き出した。教師は声をかけようかと思ったが、教師からも同じように見えたので、しばらく見守ることにした。W児は泣きながらもドッジボールを続けて、いつの間にか泣きやんでいた。今度は、W児の投げたボールがX児の顔に当たってしまった。X児が泣きかけた。W児は一瞬はっとした表情になった。そのとき、またZ児がそこに割って入った。

Z児　「顔だからセーフ」
W児　「そうや。顔はセーフや。頭もセーフ」

それを聞いてX児は泣かずにドッジボールを続けた。W児もほっとした表情になった。
その後、チーム替えをしてドッジボールは続いた。



事例10－2　「じゃあいいよ。セーフにしよう」　　2月17日（金）

今度は、W児が投げたボールをC児がわざと頭で受けた。

C児　「頭やし、セーフやよ」
W児　「でもわざとだよ」
Z児　「でも、セーフ。わざとでも、頭だから、セーフ」
W児　「そんなのおかしい」

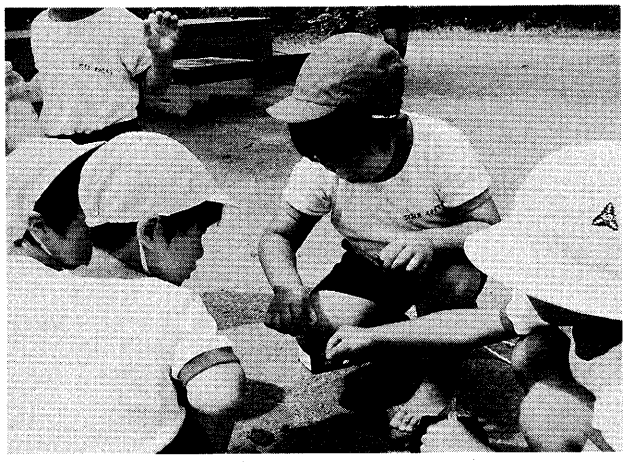
3人は興奮気味に話していたが、他の幼児らはどうしたらいいのかわからず、黙ったままだった。そこで、教師はドッジボールをしていた幼児を集めた。

教師　「みんなどう？」
W児　「わざと当たるのは、卑怯」
Z児　「でも頭だからセーフ」
C児　「これ、作戦や」
教師　「作戦かあ。ずいぶん痛い作戦やねえ。どうする」
C児　「柔らかいボールやし、痛くないよ」
Z児　「そう、痛くないよ」

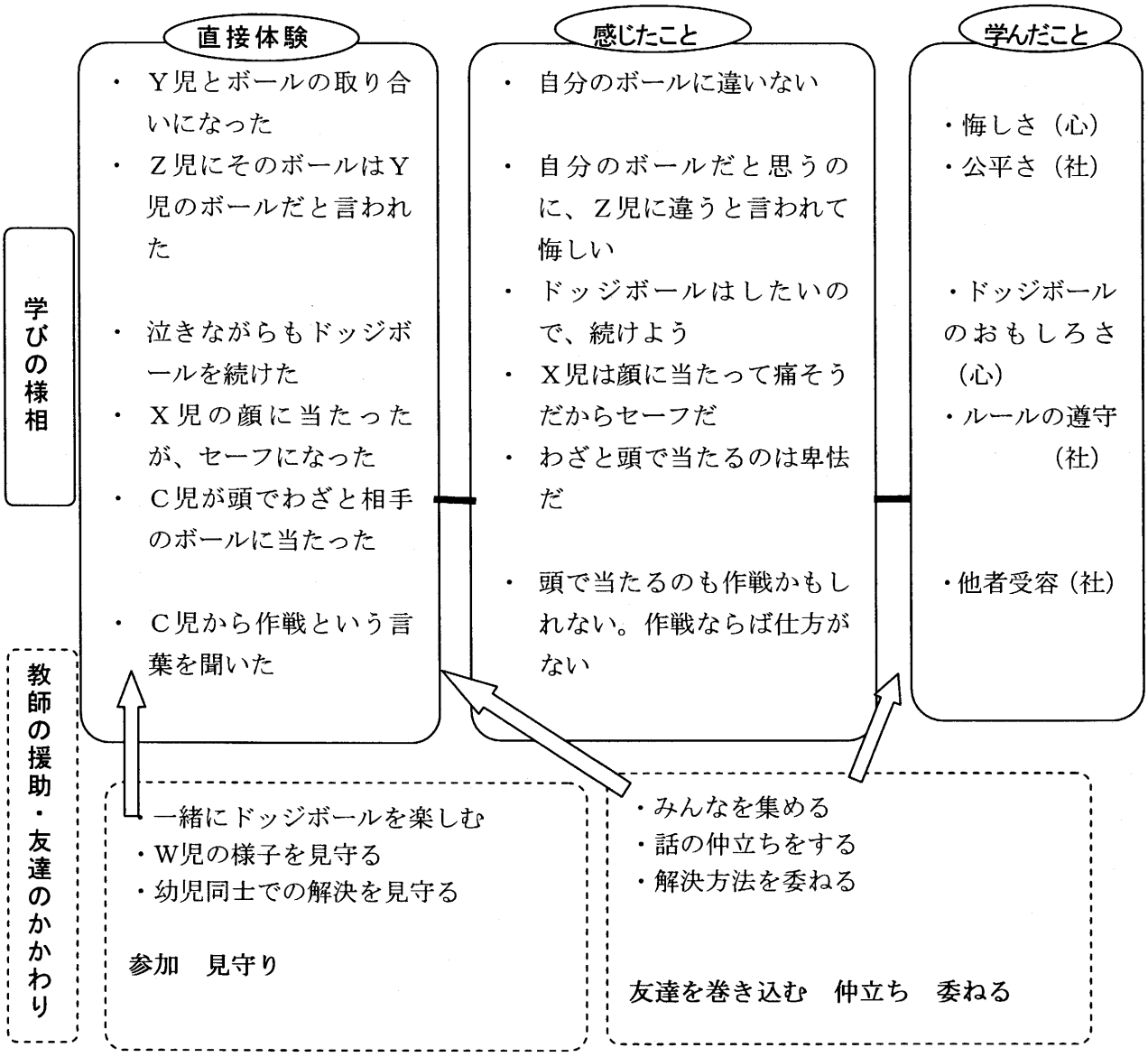
J児、M児も頷いていた。いつもは譲らないW児もじっと聞いて考えていた。そして、口を開いた。

W児　「じゃあいいよ。セーフにしよう」

Y児、V児らも頷いて、立ち上がり、ドッジボールを続けた。



＜「学び」の様相と教師の援助＞



＜今後に向けて＞

・Ｗ児は、正義感が強く、自分の思いもはっきり打ち出すが、自分の思いで進めようとするところがある。Ｚ児の公平さやＣ児のルールを守りながらの作戦にも気づいて、いつもは妥協しないＷ児にもゆるやかさを見てとることができた。今後は周りにいたＭ児やＶ児の気持ちも引き出して、それぞれに思いがあることを気づかせていきたい。

・幼児に委ねることが多く、曖昧な援助となってしまった。今後は「どんな力をつけたいのかどんな態度を養いたいのか」を明確にして、話し合いの質を高められるように援助していきたい。

5歳児　学年のまとめ

1．「学んだこと」について

～「学び」につながる4つの側面 ～

身体的側面

- 身体の支え方（事例2）
- バットの持ち方（事例1）
- 体さばき（事例1、9）
- 力の抜き加減（事例4）
- 紙飛行機を手放すタイミング（事例4）
- 指先感覚（事例5）
- コマの紐の巻き方（事例7）
- コマの回し方（事例7）
- ボールを足でコントロールする感覚（事例9）

知的側面

- 野球のルール（事例1）
- ルールの重要性（事例5）
- ルールの遵守（事例10）
- 紙飛行機の折り方（事例4）
- 積み木が倒れるときの間隔の加減（事例3）
- 摩擦と抵抗の関係（事例3）
- 物の大きさと力の強さ（事例3）
- 勝つための方法（事例5）
- といとといの角度と間隔（事例6）

心的側面

- 鉄棒遊びのおもしろさ（事例2）
- 失敗感（事例2、3、6、9）
- 粘り強さ（事例2、3，6）
- 達成感（事例2、7）
- 不満足感（事例1、4、5、7）
- 満足感（事例1、4、5、7、9）
- 疎外感（事例8）
- 受け止めてもらえたうれしさ（事例8）
- 振り返り（事例8）
- 悔しさ（事例9、10）
- ドッジボールのおもしろさ（事例10）
- 折り合い（事例10）

社会的側面

- 助け合い（事例2）
- 伝え方（事例3、6）
- 協力（事例6）
- 一体感（事例7、9）
- 助けてもらえたうれしさ（事例8）
- 相手に伝わる話し方（事例8）
- 受容（事例8）
- 役割分担（事例9）
- 公平さ（事例10）

・身体的側面、知的側面では、バットの持ち方やコマの回し方、野球のルールなど、遊びに固有のものがほとんどである。従って、いろいろな遊びを経験することで体を通してこの側面を豊かにすることができると考えられる。

・心的側面は、社会的状況（つまり、他者とのかかわり）の中で感じられているものが全てである。

・社会的側面では、うれしさ、公平さなど、心的側面と関連性があると思われるものが多い。

・社会的に必要になってくるルールに関する事柄は、5歳児の学び特有のものといえそうである。

2．教師の援助について

直接体験をすることにつながる援助

参加６
見守り２
提案３
モデル２
雰囲気の盛り上げ
確認

感じたり学んだりすることにつながる援助

思考を促す２
仲立ち３
モデル２
友達を巻き込む２
提案
委ねる２
教示２
強化
共感６
評価６
受容２
言語化
課題設定
指示

＊数字は、事例で取り上げられた援助の回数である。

・「直接体験をすること」につなげるためには、参加、見守りなどの教師の援助が多く見られた。また、直接体験をすることにつながる援助は比較的少ない。これは３，４歳からの積み重ねによって、多くの幼児が自分から遊び出すことができているからだと考えられる。
・「感じたり、学んだりすること」につなげるためには、評価、共感、問題提起、課題設定などの援助が多く見られた。直接体験を学びにつなげるためには、評価、共感などを通して、個の意識に位置づける援助が必要であると考えられる。
・「仲立ちをしたり、友達を巻き込んだり」して協同的な学びへとつなげる援助が多いことが５歳の特徴だと考えられる。